Reve des "vases communicants" d'Andre Breton

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5228

アンドレ・ブルトンの“通底器”の夢

内田　洋

夢見るテクスト

1931年に執筆され，翌年刊行されたこの風変わりな表題をもつ書物を，今日どのように読むことができるだろうか，読むべきだろうか。たとえば『ナジャ』(1928) や『狂気の愛』(1937) と比較すると，同じく著者の個人的な体験に根ざした自己探索の書，生活と詩の統一体とも言うべき内面的日誌でありながら，果敢な理論的探求の試みという性格が濃厚なため，それに応じてこの書物の読まれ方がある偏りをこうむってきたように思われる。そのことは，『ナジャ』に関する研究や論評が既にかなりの数にのぼるのに対して，『通底器』についてはブルトンの思想の展開においてそれが占める地位の重要性に比して，不当なまでに少ないという事実に表れている。あたかも，そこに関与するあれこれの思想やイデオロギー――この場合はとりわけフロイディスムとマルクシスムだが――への顧慮と理解が状況の推移によって古びてしまい，そこに一定の時代的制約が刻まれているという理由で，次第に顧みられなくなる書物でしかないかのようだ。確かに，ヴィクトル・クラストルが指摘しているように(注1)，この書の特に第一部における夢の諸理論の批判的検討の際，ブルトンは肉体と精神のいかなる区別も認めない絶対的な唯物論的一元論に陥って，フロイトに対する不当な批判に走っていると言える。自己の立場を補強するマルクス主義の文献の参照も，しばしば不適切だ。睡眠中の精神活動の持続についてのブルトンの仮説は，今日では実験的科学の見地から否定されよう。そして何よりも，著者はこの書で自己自身の夢と現実生活を素材に，ひとつの理論ないし世界観の正当性を証明しようとしてはいるが，その実験は客観性をもたず，証明能力がないという批判を避けることができない，等々。だが一個の理論が，一冊の書物が，人間の欲望の所産であって，書くという行為がそのままある夢の実現であるとしたら？その夢の行為によって，彼の精神的な危機がともかくも超克されたのだとすれば？自伝とも評論ともつかぬこの書物を，現実世界における自己を夢見つつあるテクストとして読み直すことができないだろうか。あるいはまた，そこでは必ずしも客観的な自己像の定着や，科学的真理の追求が問題なのではな

く，自己と生活の変革が企てられている夢のテクストとして。以下は『通底器』における，そしてまた《通底器》としての夢に対する，そうした主観的な――しかし書物の論理そのものに忠実な，と言いたい――アプローチの試みである。

夢と現実の通底？

互いに底の通じあう容器（Les vases qui communiquent entre eux），通底器は液体の平衡条件の研究に用いられる物理学実験器具であるが，ブルトンの一元的な世界観の表象とみなされている。このモデルに即して一層詳細に彼の思想構造を問いなおしてみると，ある種のあいまいさが浮かびあがってくる。まず『通底器』との関連でしばしば引用される次の三種のテクストを比較してみよう。

《夢と現実という，一見まったく相容れない二つの状態が，一種の絶対的現実，言うなれば超現実のなかに解消する日がくることを私は信じている。》（『シュルレアリスム第一宣言』1924）

《私の愛するすべてのもの，私の考え，感ずるすべてのものが，私を内在性に関するある特殊な哲学へと導く。それによれば，超現実は現実そのものの中に含まれ，現実の上に立つものでも外にあるものでもないだろう。またその逆のことも言えるだろう。なぜなら含むもの（容器）はまた含まれるもの（内容）でもあるだろうからだ。それはほとんど，容器と内容とが相通じた一個の器だといえよう。》（『シュルレアリスムと絵画』1928）

《そこから見ると生と死，現実と想像，過去と未来，伝達可能なものと伝達不可能なもの，高さと低さとが，もはや矛盾したものではなくなる精神のある一点が必ずや存在する。》（『シュルレアリスム第二宣言』1929）

いずれも，互いに矛盾対立する二項の，将来における統一の可能性に対する信仰を表明するテクスト，と言うことができそうだ。しかし少なくとも論理的には，三つのテクストは同じことを述べてはいない。その差異をブルトンの思想の深化と発展とみなすか，単なるあいまいさ，論理の不整合と断ずるかを今は問わない。第一のテクストでは，夢と現実の二項対立が超現実において解消されるといい，この場合，夢の概念も現実の概念も明確な定義なしに漠然と対置されている。したがって時にはこれが，実は現実生活の出来事と夢の中の事象の対立であったり，覚醒時の精神活動と睡眠中のそれの対

立であったり，あるいは広く現実界と想像界の対立であったりする。

第二のテクスト（ここには通底器を思わせる《un vase communicant》という表現が現れている）で問題になっているのは，現実と超現実の関係である。現実に対する対比項同士である夢と超現実とは，いったいどんな関係になるのだろうか。超現実を一種の夢と同視するのでなければ，現実と超現実の関係は本来，矛盾対立する二項の関係ではないはずである。その際に両項の関係モデルとして提示されるのが，相通じ，かつ相互に立場を交換することのできる容器と内容とから成る一個の器である。この器全体はもはや現実とも超現実とも名付けられない。このありうべからざる器はいわゆる通底器ではない。通底器はその定義上，底を通じあう複数の容器であって，仮にそれを唯一の底を共有して多様に分岐した一個の容器とみなすとしても，この容器と内容物の間にいかなる互換性も認められない。世界観のモデルとしての通底器とは，容器がさまざまに形を違えて複数に見えようとも，実は同じひとつの底を共有する唯一の器であることに要点があるのだろうか，あるいは，あくまで複数の容器の中をある不可視の通路を経て，同じ液体(内容物)が流通していることを示唆するのだろうか。第三のテクストでは複数の二項対立が，したがってまた，おそらくはすべての二項対立が問題となっており，そのなかに夢と現実という一対は見られないが，ほぼ《現実と想像》に符合するものと考えられる。これら一切の矛盾し相容れないはずのものが，遂に相容れると観ぜられる精神の一点（これはやがて《至高点》と命名される）に達するとき，人はまさに数多の通底器を眼前に眺めることになるだろう。《ところで，この一点を突きとめる希望以外の動機をシュルレアリスム活動に求めても無駄である》（第二宣言）とすれば，至高点からのこの光景こそ，超現実の眺めにほかならないはずだ。超現実はもはやその名で呼ばれる必要もないほどに（せいぜい《一種の絶対的な》と形容されるだけでよい）現実となっているだろう。それゆえ，今や超現実という名の現実は，あるいは逆に今や現実と呼ばれるべき超現実は，他に数多ある通底器のうちのひとつとしてこの光景の内部に存在するのではない。その光景全体を内に含んで，しかしもはや容器と内容との区別はなく，いわば名と実質の合一としてそこにあるのだ。(われわれはあいまいさを払拭するために，現実—超現実の関係モデルとして通底器に代わるもの，そこでは内部空間を満たす同じ液体がその空間を外から包摂することになるような，内容は内容のままでありながら同時に容器となるような，一種の「クラインの壺」を夢見る必要があるだろう。)

しかし『通底器』という書物そのものには，奇妙にも直接にあの実験器具

を想起させる記述も語句も見つからない。それどころか，この書物で展開された理論的探究の結論とみなしうる第三部の有名な次の一節は，ブルトンの一元的世界観について，通底器とはかなり異なったイメージをわれわれに提示しているのである（注２）。

《これはこの本が証明していることのすべてでさえあるのだが，精神の最も非反省的な活動をつぶさに検討することによって，表面に生ずる尋常でない，心穏やかならざる泡立ちを無視して進むならば，一種の毛細繊維組織を明るみに出すことができると，私には思われる……この組織の役割は，既に見たように，思考の中で外的世界と内的世界の間に生ずべきコンスタントな交換を保証することであって，その交換は覚醒時の活動と睡眠時の活動の不断の相互浸透を必然的に生ぜしめる。私の野心のすべては，ここにその構造の概略を提示することであった。》(p. 161)

ここで《外的世界と内的世界》の対立を物質と精神の対立と解するならば，両者の間の媒介ないし交換作用をなす《毛細繊維組織》とは，そもそも思考を成立させる神経や脳細胞の組織のようにも思われるが，《思考の中で》の交換とある以上は，単に外界についての反省的思考と内面の心情（非反省的な思考）の間の交換が問題なのかもしれない。すると今度はこの《交換》と，それが必然的に生ぜしめるという次の《相互浸透》の区別がつかなくなる。難解な一節だ。いずれにせよ，ここでは思考を構成する二種類の精神活動が区別された上で，両者の間に《相互浸透》の現象が認められている。つまりは深層の非反省的活動（無意識・前意識に相当する）と表層の反省的活動（意識に相当する）の対立が，睡眠ないし夢の状態と覚醒状態に置き換えられ，両者の対立関係を解消するような，相互作用を認めるということである。これらは共に精神活動であって，どうやらそれは混合する二種の液体として想い描かれている。《表面の泡立ち》や《精神の循環》や《浸透》といった表現がその証拠だ。だがはたしてこの《不断の相互浸透》こそ，ここでの通底器なのだろうか。そうだとすれば，これはもはや夢と現実の間の関係というより，透過性の薄膜に隔てられた無意識と意識の間の循環でしかないだろう。そして実際，『通底器』第一部が，睡眠時に見た夢を分析してこれを昼間の出来事のあれこれに関連づけ，夢の要素がことごとく現実から材料を得ていることを証明し，他方，第二部では逆に，ブルトンが現実に経験した一連の些細な偶発事件を語り，彼がいかに睡眠時の夢と本質的な差異のない，覚醒状

態での夢を生きていたかを論証するのを見ると，夢と現実の通底と言われるものは，実は無意識の不断の介入を受けている心的活動が《睡眠の中でも連続的に遂行される》(p. 24) という仮説そのものであることに気付く。既に『シュルレアリスム第一宣言』において展開された夢についての考察を想起する必要がある。そこでは覚醒時・睡眠時を通じての夢の連続性が主張され，夢の権能は（おそらくその概念も）明らかに拡大されて，今や意識的思考に対する地位を逆転している。人生の根本的な問題の解決に夢が適用されうるのみならず，覚醒時の行動を解く鍵を，夢の中に求める必要があり，夢こそ，理性や覚醒時の思考の貧困な能力の限界を越えて，人間の行動の範囲を拡大することができるというのだ。『通底器』における夢の概念はこれに比べ，やや縮小された感があるが，覚醒時の意識的思考と睡眠時の無意識的思考とを相互浸透させつつ，その底流として不断に循環しつづける心的活動の存在が構想されているようだ。第一宣言はまさにこの心的活動を夢と呼んでいたのではないか。しかし『通底器』では，不適切にも夢と現実と名づけられ，一見矛盾対立した二つの容器を満たして循環しつづけるもの，それをブルトンはおそらく《欲望》と呼んでいるのだ。

書く理由・夢見る理由

『通底器』が理論的探求の書としての性格をもち，それに応じてその誤謬と限界とがやがて露呈するにいたるのは，ほとんど避けられないことだっただろう。ブルトン自身が，既に 1952 年には自著を批判して(注 3)，《私はこの本に含まれたすべてに依然として同意しているわけではまったくない》と語る。《この本において，私は夢の領域にまで唯物論的命題を優先させることに固執している——それは独断専横なしにはすまないことだ——しかしこれは，私が当時他の領域において表明する実際活動の必要に，多少とも強いられてそうしたのだ……》。要するに夢の問題に関する自己の見解には，必要に迫られての多少の牽強付会があったということだ。この場合，ブルトンが展開する夢の諸理論の批判的検討は，ほとんどフロイトの『夢判断』から材料を得ており，さらに自己自身の夢の分析を試み，そこから若干の結論を引き出す際も，事はあくまでフロイトの見解に対比してなされている。それゆえ『通底器』第一部は『夢判断』批判の試みといった観を呈するほどである。一方，当時のブルトンが表明していた《実際活動の必要》とは，言うまでもなく政治行動における共産党との共闘であり，シュルレアリスムの革命への奉仕である。実際，ある観点からすれば，『通底器』においては，シュルレア

リスムとコミュニスム，詩と政治の間の通底の成否が賭けられているとも言えるのである。この果敢な企てそのものが無謀であったとか，今や時代錯誤の試みにしか見えないといった評価をブルトンはしていない。逆に彼はこの本に対してずっと《特殊な愛着を抱きつづけてきた》，その理由を，ここには《両の手綱を取り直し，今後はそれを一手に握ろうという意志がはっきり表れている》からだというとき，その両の手綱とは，とりわけ自己の詩的・政治的活動における自律性，主導権を指しているであろう。そうしたブルトンの意志が全うされたかどうかは別の問題だ。この本の意義と重要性について，著者はさらにこう言明している。《私の見るところ，今日なお，『通底器』は，そもそもの初めに私自身の運動の原動力であったいくつかの矛盾と，同時に，私の内面生活を激しく揺り動かしたいくつかの試練をも，のりこえ，克服することに成功した瞬間を示している》。われわれがこの書物に関心を寄せるとすれば，やはりこの観点をおいてほかにない。たしかに，ブルトンはいくつかの根本的な矛盾と生にかかわる試練の克服に《成功した》からこそ，この本を書くことができたのか，あるいは逆に，これを書くことによってそれが可能になったのかは定かではない。しかしいずれにせよ，これは既に一冊の書物が読者をひきつけるに十分な理由となるだろう。

『通底器』はいつ，いかなる動機で，どこから書き初められたのだろうか。あるいは，何が著者をして書くことを可能にしたのだろうか。ブルトンはこの本の特定の箇所に，目立たない形でその答えを示しているように思われる。それは第一部で，《私生活の壁》の背後に己を秘匿したフロイトの限界を打破してみせるために，著者が留保のない報告と解釈を試みる夢，自己自身の見た 1931 年 8 月 26 日の夢の記述末尾である。この夢の中でブルトンは共産党の幹部らしき人物と折り合いがついて，政治宣伝のためにドイツへの講演旅行に発つことになる。行き先はまずベルリン，講演の題目はシュルレアリスムでもかまわないらしい。《出発は明日だ。私は考える，つい今しがた少しばかり金が手に入ったと。贋カシャンは，B……と，たしかルネ・クレールを連れて行くのだと念を押す……。私は講演のテーマとして，すぐにも書き始めようとしていた本の材料を利用しようと思う》(p. 33—34)。そしてこの計画中の本について，《それがこの本である》と原注がある。(カシャンはフランス共産党代議士で機関紙『ユマニテ』の主幹。B…という匿名の人物は，おそらくブルトンの恋人Xが彼を棄てて結婚した相手エマニュエル・ベルルであろう(注 4)。ベルリンという地名によって，その伏せられた名が暗示されているとも言える。) つまりこの夢の時点で，『通底器』はまさに書き出さ

れようとしていたし，その材料は既にブルトンの手中にあったのである。この直後に《解説的覚書》がつづき，《この本の第二部で私が，ある種の目的のために当時の私の迷妄のいくつかをさらけ出さざるをえなくなるとき……》(p. 34)とあるが，その第二部は，この夢の4か月前，4月5日から24日までの夢遊病者じみたブルトンの日々を記述しているから，これが夢の中で《本の材料》と呼ばれているものと考えてほぼ間違いない。すると，ブルトンが国境を越えてドイツですることになる講演は，部分的にこの『通底器』に似たものとなったことだろう。そして同時に容易に推測されることは，8月26日，まさにこの夢を見たことが直接の動機となって，執筆が開始されたに違いないということだ。この夢の記述と分析と考察とが，第一部のテクストの中枢をなしていることが，その論拠となるだろう。《講演のテーマ》についてのブルトンの《分析》によれば，彼にとってもやはり，夢はここで《以前から心ならずも延期してきた仕事を緊急に企てるよう〔彼を〕そそのかしている》(p. 57)ように見える。講演のテーマとは，実はこの夢のテーマと同じ「橋を渡らねばならぬ」であったはずだ。そしてそれは，間もなくこの本のテーマともなる。なぜなら，ブルトンの主張するように互いに遠く隔たった二項の間に橋をかけ，その橋を渡るようにと誘うのがこの夢の主要関心事，いわゆる夢思想なのだとすれば，それはまさしく『通底器』の思想にほかならないからである。しかもそれはこの特殊なひとつの夢のテーマというだけではない，どうやら夢の一般的機能として認知されているらしい。《私はここで夢の主要な有用性を確認する》とブルトンは言う，《それは単に〔心の〕傷を癒着させるだけではなく，語の最も勝れた意味での運動，すなわち，人を前方へと導く現実的矛盾という純粋な意味での運動をもたらすのだ》(p. 59)。要するに夢は人間が「生の飛躍」を成し遂げるのを助け，「行動」へと誘う《光明の知られざる源泉》だということになる。したがって，橋を渡るようにと促すこの夢は，夢一般についてのアレゴリーとなっている。少なくとも，ブルトンはひとつの特殊な夢から，夢の機能についての一般的考察を引き出しているのだ。こうして夢は，『通底器』の内部で，密かにそれ自体が一種の通底器としての機能を果たしていることがわかる。夢というものが一種の通底器であることを気付かせてくれるひとつの夢を見たこと，それが『通底器』という書物の直接の発端となったと推論するのは，むしろ当然すぎることであろう。残る謎，それは，では通底器としての夢はどこから，いかにしてブルトンに到来したかということである。この問いが，書物『通底器』の発端に関する最初の問いの単なる反復であることは明白だ。そして人に夢を見さ

せるものは，ある密かな欲望であると，さしあたりは言うほかにない。

テクスト中の《夢》の分析

1）著者自身による分析の試み

夢が一種の通底器であると言うためには，夢は単に夢であってはならず，その対立項とみなされた現実なるものとある仕方で通じていることを証明しなければならない。第一部はまさにそれに充てられると言ってよいだろう。冒頭，ブルトンは『夢とその操作法』(1867)の著者エルヴェー侯爵の実験に，なみなみならぬ関心を寄せている。現実の世界（もしくは覚醒時の生活）から夢を本当に意のままに操作することができれば，そこには《現実の世界と夢の世界の対立を最終的に和解させる可能性》(p. 10)があるからだ。さらにブルトンは，その成果を媒介にして，逆に《想像されたことから体験への，より正確には体験すべきものへの変換》が可能になると予想している。自己の欲望を夢の中に実現しようとしたエルヴェー侯爵の企てを一歩進めて，夢から体験すべきもの，真に現実化すべきものを得ようというのだ。そうした意図の延長上に，夢の権能についてのあの極めて高い評価が現れる。夢は人を行動へ，世界の変革へと導くはずのものなのだ。夢の主要な理論家たちの検討を行いながら，ブルトンはフロイトの所説に対してもいくつかの批判を加えているが，とりわけ後者が予言的な夢（目前の未来を約束する夢）の存在を否定した点で，《フロイトは確実に思い違いをしている》(p. 20) と断じるのもそのためだ。夢が過去を明かすだけで未来に関与しないと考えるのは，運動というものの価値を否定するものであって，フロイトにおける《弁証法的発想のほとんど完全な欠如》を際立たせているにすぎないという。これに反して，その直後にブルトンが引用する F. W. ヒルデブラントには，弁証法的発想が欠けてはいないらしい。その引用はフロイト『夢判断』上巻冒頭の，「覚醒状態に対する夢の関係」をめぐる意見の対立を概観した一節で(注５)，フロイトが締めくくりに引用している文章の部分的な孫引きである。《夢の生活と覚醒生活との関係についてのこういう意見の対立は，実際には解消しがたくみえる。だからこの辺でヒルデブラントの意見を紹介しておくのがよかろう……》。それによれば，夢の特性を叙述する際の第一の対立をなすのが，《夢は，現実かつ本当の生活からまったく切り離されたもの，あるいは夢は夢だけでひとつの纏まったものであるとする見解と，夢と意識とは交錯し，つねに依存しあっているとする見解との対立だ。》この対立を調停和解するためにヒルデブラントのとる論法は，《ところが，一見その正反対の説明も，ま

た同様に真実で正しい》と認めることでしかない。《夢の仕業がどんなに奇妙なものであろうとも，夢は決して現実の世界から遊離することはできない……》と。これがブルトンのいわゆる弁証法的発想なのだとすれば，フロイトの「欲望実現の夢」理論とハヴロック・エリスの恐怖夢の理論の対立をとらえて両者に弁証法的発想が欠如しているとするのは，明らかに不当な非難だ。少なくともフロイトは，『夢判断』第III章で「夢は願望充足である」という命題を提示した後，第IV章「夢の歪曲」で，恐怖や不快感を伴う夢の存在が《願望充足説と矛盾しない》ことを論証しているのだから。いずれにせよ，『通底器』におけるブルトンが自己の夢の分析から引き出した結論は，《夢の最も崇高な創造も最も怪異な創造も，その構成要素を，可感の世界がわれわれの目に示しているもの，ないしは覚醒時の思考のうちに何らかの仕方で見出されたものからもってこなければならない》というヒルデブラントの断言を越えるものではない。事実，ブルトンは夢の顕在内容を一歩一歩辿って，《幼児期の場面の再構成を行っていないという限界》はあるにせよ，《夢の形成に寄与しえた最近ないしそれ以前の要素のいかなるものも除外してはいない》(p. 57) と判断し，そのことをもって，《このような解釈が夢思想を満足すべき仕方で照明する性質のもの……夢の内容を汲みつくすもの……》(p. 58) と主張できると考えるのだ。だがそうして彼が得た夢思想なるもの，「橋を渡らねばならぬ」は，はたしてフロイトの意味での夢思想なのであろうか，さもなければ，それはいかなる水準の思想なのか。

『夢判断』のフロイトは，自分自身の見た夢を《標本》として取り上げる際に，私生活の秘密をさらけだすことになる危険を考慮して，理論の説明・論証に必要な範囲内に分析をとどめるという，慎重な態度を保っている。その結果，彼自身の夢においては性的な関心が見たところ何の役割も演じていないという，《困った矛盾》(p. 29) を生んでいるとブルトンは指摘する。彼はフロイトが，つまらない私的動機のために任務を放棄したと非難さえしている。しかし忘れてならないのは，フロイトがそもそも夢の解釈に，分析と総合の二段階があると考えていることだ。彼の用語法では，夢の《顕在内容》を《分析》して《夢思想（潜在内容）》を発見し，そののちこれを総括することによって《顕在内容を潜在内容から再構成して見せる》，これが夢の総合なのである。ブルトンが不満を表明しているあの「イルマの注射の夢」の解釈も，もとより分析でしかなく，《完全な総合は，読者諸君の知らぬような人間の夢についてのみ》伝えることができるとフロイトは言う。事実，彼は《その後二つの夢の完全な分析と総合とを『あるヒステリー症分析の断片』1905

年において行った》(注6)。それゆえ，われわれはブルトンの非難がとりわけこの著作について妥当するかどうかをこそ問うべきだろう。それはさておき，夢の顕在内容とは何か。ひとまずそれを，一見したところ物語風の展開をもつ一連の夢の映像の，記憶にもとずく多少とも忠実な言語的転写であるとすれば，結局それは，夢を記述しえている限りでの夢の記述そのものにほぼ等しい。その夢物語の細部を説明すること，つまり夢の素材と源泉を現実生活の記憶の中に探りあて，その部分の隠れた意味を読み解くこと，これが夢の潜在内容を把握するための分析作業ということになる。そう考えると，『通底器』においてブルトンが試みている自己の夢の分析も，まさしくフロイトの言うところの分析でしかないのである。彼がフロイトに挑戦して，遙かに大胆に私生活の壁を破り，自己を露呈し意識化しようとしたことは確かだが，そのことによってただちに自己の無意識の領域に自力で到達できると信じたとすれば，それは明らかにブルトンの錯覚であった。

2）ある精神分析家による分析の試み

では，われわれは問題のブルトンの夢に，彼自身によるそれよりも透徹した解釈を与えることができるだろうか。夢の記述を通して，その《思考の現実の機能》(第一宣言)，彼の《精神の地下の歩み》(対談集)を，把握できるというのだろうか。定義上，本人にこそ意識化が難しい彼の無意識の構造を明るみに引き出せると。ここで，現代の精神分析家ジャン・ギヨマンによるこの夢の解釈の試みが想起される(注7)。ブルトンは《扉のように開け放しにされていて，鍵を探したりしないですむような書物にしか興味をもたない》と主張し，あくまで実名を要求したうえに，《私はこれからもガラスの家に住みつづけるだろう》(ナジャ)と断言した。にもかかわらず，実際には自分自身の家庭生活や内面の歴史について，ごく僅かなことしか公表していない，ギヨマンはそう指摘したうえで，ただひとつの夢の記述からブルトンの精神分析をしようなどとは思わないし，われわれの参照しうる資料の現状では，そういう企ては時期尚早だと判断する。したがって，《われわれは分析資料を，詩人の記述そのものの通時的な動きに結びつけながら，これに主題論的アプローチを試みることで満足しよう》という。とはいえ，それが精神分析的解釈であることにかわりはなく，ギヨマンの目には夢の真相は全く別様に映っている。彼によれば，夢の前半は極端な前性器段階の負荷に妨げられた，性器段階の異性愛的欲動の挫折感を表すものだ(ここでも例のごとく，父と母，両親の二重の禁圧という無意識感情が特徴となっている。ブルトンはこの夢

の一部が確実に幼児期の場面に由来していると認めながらも,《その想起もここでは二義的な興味をもたらすにすぎないであろう》(p. 57) という理由でまったくそれを再構成していない)。後半はその結果としての同性愛的防衛態勢の立て直しを表現している。この解釈は，愛の喪失の苦悩（恋人Xとの離別）を友愛のテーマ（シュルレアリスムの同性の朋輩たちによる認知）を媒介として同性愛的に処理しようとする夢（成人男性の仲間たち，コミュニスト——象徴的に接近可能となった父のモデル——との社会的関係の樹立）と見るもので，必ずしもブルトンの解釈と相容れないわけではないが，そのレヴェルが全く異なる。両者の差異はいったい何に基づいているのだろうか。ギヨマンによれば，ブルトンの分析は夢の諸要素から最近の経験のあれこれを連想し,それが形を変えて夢に出現していることを示しているにすぎない。ブルトンは幼年時の思い出の中に埋めこまれた欲望との明確な連関を，何ひとつ記していない。ギヨマンにとって，夢を多少とも深く解明するとは，実はその連関を見出すことなのだ。ブルトンは自己の無意識の傍らをむなしく通り過ぎた。彼は分析資料のうち，検閲によって最もよく許容された明白な相関関係を読みとっただけで,無意識の真の意識化はまったく生じていない,というのが結論だ。フロイト理論の誤解や夢の分析技法の未熟を指摘して，責めをブルトンに帰することは容易だろうし，そもそも自己分析の可能性を疑うこともできる。しかしもうひとつ重要な観点は，両者がはたして同じ夢を分析しているかどうかということだ。われわれに与えられているのは,1931年8月26日にブルトンが見た夢そのものではなく,単にかろうじて忘却を免れた夢の輪郭の，ことばによる再構成，夢の記述にすぎないことは言うまでもない。そのうえに，ブルトンの夢の（オリジナルなき）テクストを，ギヨマンがその《要点，内容》(substance) と称して書き直しているのを読むと，随所に看過しがたい異同を見出すのである。たとえば恋人Xとの（ブルトンによれば）《たぶん深刻な口論のあとで》の離別の理由が,《おそらく彼女がかつてかかりあいになった，いかがわしい事件のとばっちりを避けるため》と推測が付け加わっている。また夢の前半末尾で，Xを憎んで待ち伏せしている老いた狂女が，いまXを探している場所以外で彼女をつかまえることができるかどうかあやしい，と思いめぐらす「私」の，そのとき覚える《安心と悔しさのいりまじった感情 (p. 32) については，何の言及も分析もないといった具合だ。このように夢のテクストが読み解かれるとき，われわれは常に多少とも部分的な，人それぞれのテクストを読んでいるにすぎないことに気付かされる。勿論，それは夢を見た人自身によるテクストこそ真正である

とか，彼の解釈こそ尊重されるなどということをけっして意味してはいない。ともあれ，結果的に問題の狂女を，ブルトンはおそらく狂気という特徴とXに対する敬意に理由がある点からナジャと認定したのに対して，ギヨマンは子供を監視し迫害する《男根的母親》のイマーゴとみなす。これが解釈の最初の，決定的な分岐点となる。どちらが夢の真相（もしくは深層）を把握しえたかということは，ここでのわれわれの問題ではない。両者がともに，ある夢のテクストを前にして，その真の思想と現実的機能を明らかにするつもりでいることを確認するだけでよい。『通底器』の中にブルトンのしかじかの日付の《夢》が存在すること，そのことにはいかなる疑念も抱かれてはいない。しかし，それはさほど自明の事実ではありえない。ひとたび夢の記述が一冊の書物の構成要素として組み込まれ，その有機的連関の中で読まれはじめるや，それはもはや夜の沈黙の中で孤独に生きられた夢の意味作用を保ちえないはずではないか。夢の記述を書物のコンテクストから切り離して解釈することで，その夢の固有の意味を捉え得たと信じるのは，夢を書物の中に持ちこまれた一個の物であるかのように扱うことではないだろうか。そしてまた，夢思想についての両者の認識の差は，一方が正しく他方が誤っているというよりも，一方あるいは双方が，その夢のテクストをもとに，めざめながらに新たな夢を織りあげて，己の書物のコンテクストに組み込んだと考える可能性をどうして否定できるだろうか。少なくとも，著者自身による夢の分析も，それ自体が解釈を要求するのであって，最終的な真理である保証はどこにもない。もしわれわれが著者に抗して「より正しい」分析を提示し，彼の誤謬を批判するとすれば，それは著者に別の夢を見るようにと要求するようなものであろう。われわれ読者にとってはあくまで『通底器』のテクストの内部で機能すべく夢見られているテクストの一部が問題なのだ。

3）テクストにおける《夢》と《現実》

では，夢に対置されるべき現実はどこにあるのか。はたして『通底器』の中に《現実》はあるだろうか。あるとすればそれは，夢の記述の直後の《解説的覚書》で簡略に言及されている，1931年におけるブルトンの感情と知性両面での現実的状況の記述と，《分析》の項で想起される些細な断片的諸事実をおいて他にないだろう。第二部はもっと豊富で，同年4月5日から24日までに彼が日常生活のさなかで遭遇した特異な出来事の数々に関する報告がそれであろう。《私にとってこの間に起こったことのすべては，私が伝えた少数の事実に存しており，それらはつぎ合わせてしまえば……数時間以上を占め

ることはあるまい》(pp. 129-130)とある。その少数の事実がそれだ。この場合，作家の記憶は選択的に機能していることに注意したい。それらの事実は何らかの理由で選びとられ，配列され，そこに登録されているのだ。ブルトンはこれを《数日来自分を弄んできた魔法》(p. 121) と呼び，また《延々と何日にもわたる白昼夢》(p. 128) とも呼ぶ。明らかに彼は，第一部で夢を論じ，夢がそのすべての要素を現実から汲みとっていることを証明したあとで，第二部では逆に現実が常に多少とも夢の性格を帯びていることを証明することによって，両者を通底器たらしめようとしているのだ。二つの器の双方を満たし循環する液体は欲望にほかならない。既に第一部において，《夢の世界と現実世界はただ一つのものである》(p. 70)という結論的命題が提示されているが，これは，双方が差異を抹消され互いに還元されて同一化するという意味ではなく，欲望という実質を共有する不可分離の全体，相補的に一体をなす二項だという意味であろう。第二部における必ずしも明快ではない次の一文は，そのことを示唆するもののように思われる。即ち，《覚醒時の諸表象と眠りのなかの諸表象との同一性の概念が完全に獲得されたときこそ，両者の差異からも，現実世界についての唯物論的理解を両者の一体性によって強固なものにするように，利点をはっきりと引き出すことができるだろう》(p. 127)。

要するに『通底器』のテクストの構成要素である《夢》も《現実》も，一冊の書物を通底器たらしめるのに役立つ限りにおいてのみ選択され，部分的に記述され，単に夢でもなく単に現実でもない，まさしくテクストにおいて，テクストとして不可分離の存在を獲得しているのだ。そこでは夢のテクストが新たなテクストの夢の素材として，転移・圧縮・置換されているとすれば，現実はブルトンの注釈ないし解釈によって変形を被っている。それは既に半ば夢見られた現実だということができる。さもなければ，『通底器』そのものは現実世界にいかなる通路ももたない，閉ざされた夢の世界となるか，著者のごく限られた一時期の行状に関する報告書か，一種の自伝となっていたことだろう。とはいえ，いわゆる客観的な現実なるものが，なんらかの書物その他の場所に安定的に存在するわけでもない。それは人間的諸経験を総合することによって構成されるほかはない概念なのだから，不断の弁証法的発展過程にある。それゆえそれは一層，個人の主観を越えたある非人称的存在の夢に似ていると言えるだろう。したがって，夢と現実の通底がありうるとすれば，個人の夢が（睡眠時のそれであろうと覚醒時のそれであろうと）万人の夢でもあるような場合なのだ。ブルトンが夢の中に登場した《ノスフラテュ

のネクタイ》に類する超現実的オブジェ，およびその他の詩的・芸術的構成物の本性について次のように記したとき，それは夢と現実の通底の可能性の条件にほかならなかった。すなわち，そこには《厳密に作者個人のものではあるが，その本質においてあらゆる人々のそれに結びついている関心事が，遠まわしな形で表現される手段を得ている》，と。その条件においてのみ，それらの構成物（テクスト，オブジェ）は夢と現実の矛盾対立を解消して，確かに超現実的と形容される資格を得ることだろう。

「アシーシュの夢」の機能

1）論証のための一例？

第一部末尾近くに，ブルトンは第二の夢を配した。第一の夢に4か月先立つ，4月5日早朝の，いわゆる「アシーシュの夢」(pp. 71—74) である。第二部はその4月5日午頃から24日までの一連の出来事の記述が中心となるから，これは形式的に第一部と第二部の間の橋の役割を果たしていることは明らかだが，内容的にはどうか，やや詳細に検討してみよう。

夢の記述そのものは，この場合も一つの明確な理論上の問題に答えるための論証の過程に，いわば例示を目的としているかのように挿入されている。そのプロローグにあたる一節の冒頭が，《問題》を端的にこう提示している——《夢を手段に，唯物論的認識を弾劾しようと努める議論にけりをつけてしまうために，残るのはただ……夢の世界と現実世界にそれぞれ帰属する真の行動と幻の行動について，立体感と鮮烈度のどんな差異に基づいて区別がなされるかを示そうと試みることだけだ……》(p. 70) と。唯物論者としてのブルトンがここでやろうとしていることは，要するに唯物論の立場に不利な夢を用いての観念論的議論を撃破すること，夢の悪用を一蹴することなのだ。理解しにくい点があるとすれば，ここで夢と現実とがそれぞれ幻（イリュージョン）と真実の領域として明確に区別されているのに（70頁では《精神的均衡というものは，この区別をはっきりつけられるかどうかにかかっている》とさえ，ブルトンは書いている），それが夢の世界と現実世界の一体性を論証済みのこととした直後だからである。ブルトンに従えば，夢と現実は一つのものだが，そこでの諸活動は虚と実に明確に区別されなければならないのである。ブルトンはさらに，《人間の正常な社会的行動を可能にするその弁別能力》が何に由来するかを問い，立体感だの鮮烈度などという感覚的な基準が，それだけでは十分でないことを証明するような例として，問題の夢が挙げられている。ただしこの場合は，テクストの字体を変えることによって当面の

問題に関与する特定部分を強調しながら，その大筋が伝えられるだけだ。夢の分析はなされない。ブルトンの知る限り，《今日までのところ記録され認められたことがない》特異性を有するこの夢の，特異な所以を論じた後で，結論として，《時間の試練に付された感覚的基準》こそ，《現実の対象と他のすべての対象とのあいだにある弁別の，必要にして十分とみなしうる基盤》(p. 76) だと認めている。言い換えれば，夢の中の幻はどんなに現実と錯覚するほど真に迫っていようとも，やがて消え失せて持続することがない。外的対象の喚起する感覚は《一日かぎりの偶然によってではなく，何かしら破壊できない接着剤によって統合されている》(p. 76) というアンリ・ポワンカレの考察を引用して，これを《天来の妙想》と褒め讃えてさえいる。この夢の中では，立体感においても鮮烈さの度合いにおいても現実と区別できない夢を，幻覚と意識しながらなおその鮮烈な現実感を否定できない。だから少なくとも夢の中では，夢と現実とが共に夢に包含されることがあることになる。あるいは現実と区別のつかない夢を内に含んで，これを幻覚と意識しつつ見る外側の夢は，これこそ現実と区別がつかないとも言える。この区別の消失は狂気と意識されており，夢見る人ブルトンはそんな状態に達することを望むどころか，逆に気が狂っていく自分を感じて恐怖を覚え，わめきたてる。人はただ夢から覚めることができたときにのみ，その恐怖から逃れられる。またそれが夢であったことを人が知るのは，ただそれが消えうせたときのみだ。

結論部冒頭でブルトンは書いている——《見られるごとく，みずから夢だと意識した夢，意識的ならざる夢の中に挿入された意識的な夢，触知可能な証拠を伴って，生きられた現実と思いこませる夢があるという事実を反対論拠として，唯物論に挑まれるかもしれない最終的な争いは……空しいものとなるだろう》(p. 75)。《見られるごとく》，というのは，アシーシュの影響によるものとして夢が恐ろしい現実感をもって出現させた二人の裸体の女の子が，《いかなる客観的現実にも対応していない》という，前節の断言を指しているだろう。この場合観念論は，夢の映像にも固有の現実性を認めるばかりか，外的対象に対しても，同じ観念的な存在しか認めないための論拠として，この夢を利用するかもしれない。しかし夢の映像は，それがどんなに鮮烈であろうと夢の圧縮作業の結果であって，外的現実性はもたないと主張するのが，ブルトンのいわゆる唯物論であろう。その主張自体に問題はないにしても，その論証の方法たるや，《この女の子たちは，最初の夢における「ノスフラテュ・ネクタイ」と同じ意味で，いかなる客観的現実にも対応していない》という断言だけなのだ。のみならず，ブルトンは最初の夢の分析を通じて，

夢の映像がことごとく，その外見にもかかわらずしかじかの客観的現実に対応していることを証明して，夢の側から現実へ通底させることに努めてきたのではなかったか。

結局，「アシーシュの夢」は記録されるに値する特異性をもつがゆえに提示されているという印象が強い。現実感の強さが夢と現実の区別の根拠になりえないことを示す実例として，論証に消極的な寄与をしていることは認めるとしても，外的対象は夢の映像とは異なり，その感覚が時間に抗して持続的に統合されている，その点でのみ両者は区別されるという結論に，「アシーシュの夢」はなんら貢献していない。そもそも夢の映像が現実の外的対象とは異なるなどということは，夢内容を知るまでもなく，それが「夢」と名指されている以上は前提になっていたはずだ。もしこれが例示の機能をもたされているとすれば，論証すべき命題が論証の前提になっていることになる。だからこの夢は，論証過程における例示のためというよりは，むしろテクストのこの場所に置かれることによって——著者がそれを意図したにせよ，しなかったにせよ——結果的に別のさまざまな機能を発揮しているように思われるのだ。

2）あるテクスト分析的読解

J. ベルマン-ノエルは，テクストそのものの無意識を聴取するという立場から，『通底器』のいわゆるテクスト分析的読解を試みた（注8）。その中で，ブルトンが《読者の関心を無駄にそらさないために》（分析家によれば，むしろ読者の注意を具合の悪い方向に引きつけないために？）あえてしなかった「アシーシュの夢」の解釈を提示している。それによれば，この夢の特異性は4つの段落が明示するように四部構成をとっている点にあり，しかも各部が物語的時空の一段階に相当して，シークエンス1と4，2と3がそれぞれ対応する《合わせ鏡》的構成の2つ折りの絵をなしている。すると，結末は冒頭部を別の音域に転置したものとなり，謎が部分的に解決されることになる。たとえば《金属的な輝きを発する，冠毛のある紡錘形の見事な魚》（§1）は，部屋に入ってくる《私の父》（§4）に対応し，《私に石を投げかえして……私を怖がらせ魚の追跡を断念させる鳥-女》（§1）は，《私のしくじりのせいで，最近，こんなふうに家具がみんな汚されてしまった，といって不機嫌な私の母》（§4）に対応する。こうして，父のペニスの不安な追跡行——母の体を汚すこと——自慰の夢——超自我による迫害——恐怖，といった一連のエディプス的場面が浮かびあがってくる。ベルマン-ノエルは，このように一

対の画面を左右対照させることで夢の意味は明瞭になると言い，要するにこれは，異性愛の挫折を自己愛的同性愛的退行の中で慰め，これを克服するために父の形象を必死に追求する夢とみる。こうしてテクストの第一部，第二部を通じての夢のテーマの連続性が強調される。彼のいわゆるテクスト分析の際に，ブルトンの実生活を知る必要はない。むしろこの夢（のテクスト）が読者の無意識に対して何を示唆するかを問うのだ。《私はこの資料をテクストとして，テクストの枠内で解釈することができると主張する，そして同時に，人間ブルトンに対してはそれを認めなくても仕方がないが，作家ブルトンに対しては一種の正当性，彼の意に反しての真実性を認めることができる》，と。この態度は，夢解釈の実践の誤りを指摘してブルトンの自己分析を虚偽と非難する精神分析家ギヨマンのそれとは異なり，人間の精神分析のための資料としてテクストを扱うのではなく，テクストに相対した読者として，無意識のレヴェルでそのテクストに共鳴しようとするテクスト分析家の立場を端的に示している。しかし，われわれはむしろテクストの表層で記号の戯れが生み出す意味，あるいは第一部のコンテクストの中でこの夢の内容および特性が（たぶん図らずも）発揮する機能に，もっと注意を払うべきではないか。それはいわばテクストの表層の無意識と言ってもよく，ここでの書くことへの欲望，書く理由を，われわれに一層よく開示するだろう。

3）超現実的光景の恐怖

われわれの観点からすれば，「アシーシュの夢」の特異性は，第一に四部構成ではあるが，しかしけっして整然たる対の関係をなしてはいないこと。特に夢の最終段階，《私はまたふたたび，ひとりで寝ている》以下の幻覚の再現は，厳密な対称性を破っており，ベルマン-ノエルはこの部分に全く言及していない。第二に，これは夢の中でアシーシュの幻覚を見る，という夢内容で，いわば夢の中の夢という二重構造を具えている。しかも一旦消え去った幻覚が再び出現して，夢見る人はこの夢の中の夢から直接に現実世界へと覚醒する。第三に，夢内容とは別に，ある夢要素がそこで帯びる《恐ろしいほどの鮮烈さ》は，この夢の形式的特異性の一つであり，その極度の現実感がもたらす恐怖は，夢見る人を遂に覚醒にまで導いたと推測される（テクストはそう明記してはいないが，ともあれ，「私」が恐怖の叫びをあげたところで夢の記述は終わっている），いわゆる恐怖夢であるらしい。ブルトン自身はこの夢が満たそうとしている願望，自己の精神に対するその機能を次のように解釈している，まず，夢を内に含み，それを利用した夢の意味について，最初に

考察した人W・シュテーケルを，やはりフロイトの『夢判断』を介して参照する（注9）。それによれば，「夢の中の夢」は真正な現実や実際の記憶にかかわっており，それを「これはただの夢だ」と思うことによって，その本来の価値（現実性）を打ち消すという目的をもっている。換言すれば，夢の中で夢にされた出来事は，その現実性の明白な証明だとフロイトは言い，実際にあったことを否認するために，夢が論理的な枠を打ち砕くのだとブルトンは書く。そして「アシーシュの夢」はまさにこの種の夢の正確な反対物なのだ。すなわち，夢の中でアシーシュの幻覚と意識しながらその現実感を否定しえず，《これは現実そのもの，絶対的な現実だ》と信ずるに至るという点で，前者とは方向が逆であり，その目的も，ブルトンによれば，《実際にはなかったことをあったこととする，つまりあらゆる点で可能なこと，全面的可能性として障害なく現実生活に移行すべきこと，とするにある》(p. 75)。前者の夢の中の夢が，目覚めたときに忘れられるべき事実であったとすれば，この場合は夢が現実化を促し，もしくはその可能性を信じさせようとしている幻影だ，ということになる。現実そのものと言ってよいほどの非現実(夢)，一種の《絶対的現実》とは，まさにブルトンの超現実ではなかったか。つまり彼はここで，自己の超現実の夢，夢と現実の対立の解消という夢を，現実へと移行させることを（少なくともテクストのレヴェルで）夢見ているのだ。夢はそれを夢の中で実現してみせることで，現実生活においてもそれが可能だと言っているようだ。ここでの超現実の表象が，《この上なく調和のとれた一個の，白い動く塊をなしている》二人の裸の女の子であることも，もしそこから余りにも明白なエロチックな要素を除外するならば，《夢の世界と現実世界とはただ一つのものである》という超現実主義的命題にふさわしいと言えるだろう。実際ブルトンは，夢の中で達しえた最も強烈な《不可思議の印象》(une impression merveilleuse)に支配されながらも，そこで起こっていることに《性的には何の興味もない》と明言している。ベルマン-ノエルはこれを精神分析用語の意味での否認（dénégation）とみなして，逆に夢見る人にとっては現実の断片の価値をもったアシーシュの幻覚（夢の第三パラグラフ）は，遺精を惹起するかそれに随伴するファンタスムの場面だと考える。たとえそれが真相であったにせよ，テクストはそれを別の方向に夢見ようとしているのであって（夢をこの場所に配して利用すること，それこそここでのテクストの論理なのだ)，それは単に真実の隠蔽ということに尽きるものではない。だからこそ，ブルトンはこの夢の解釈をあえて提示しない。提示すれば，それが必ずしもテクストの論理に添うものではないことを彼は承知し

ているからだ。《いま報告した夢について私が行いえた解釈が，たとえそのことをさほど明瞭に裏付けるものではなかったとしても……》(p. 75)とある通りである。「私」が友人と一緒にアシーシュのために赴く場所，同じ理由で他にも多くの人が集合しているあの《城》とは（ブルトンの読者が彼の書物の中で頻繁に出会う形象だ)，シュルレアリスムのグループの共同体的空間と解することができるだろう。《この城の発見は私にとっては思いがけない幸運だ》，なぜなら，そこでは現実の否定としての夢がこれほどに現実的でありうるのだから。ただ，この超現実を出現させたアシーシュが，方法として正当なものかどうかについての疑念が感じられ，夢の中で彼は大麻そのものの素性を怪しみ，かつその入手の仕方に後ろめたさを覚えている（ブルトンはここで,《実際にアシーシュを摂ったのは数年前に一度だけ，それもほんの少量》と，言い訳めいた注を付してもいる)。スプーン二杯分の大麻を，ドイツで朝食に供されるそれに似た二つのプチ・パンに挟んで食べるという記述は，ヘーゲルとマルクスの弁証法（矛盾対立する二項の止揚）のかなり強引な学習を，物質主義的メタファーで表現しているかのようだ。だがブルトンは，この方面でやや無理をしているらしく，このアシーシュは《少し赤味がかって，十分に緑色をしていない》ので，彼の好み通りではない。周りにいて《かなり皮肉な態度を見せる》召使たち（彼らは一体何者なのか）が次に出したアシーシュも，《前のより緑色をしているが，やはり私の知っている味ではない》。ここでわれわれは，フロイトの理論とその夢分析における不徹底に対するブルトンの不満を想起できるだろう。

《城》の空間と，幻覚の舞台となる《私の家》とは，夢の第二，第四部においてはっきりしたコントラストを見せている。どんどん拡大していく《私のによく似た部屋》（幼児期への退行？）は，父母が出入りして《私》をとがめる不安な空間だ。彼らに幻の現実性を証明し，自己弁護しなければならない。これはまさに現実世界におけるブルトンの精神状態にほかならなかった。シュルレアリスム革命という理念の正当性と独自性を，コミュニストたちに対して主張し擁護するブルトンを，たとえば『正当防衛』(1926)のようなテクストに見ることができよう。『通底器』においても，1931年における自己の知的状況を解説して，《マルクス・レーニン主義的な形での社会革命》にシュルレアリスムが参加する必要があるという主張が,《冒険のための冒険への趣味によるものではないことを認めさせるには，異常な困難があった》とブルトンは嘆き,《この領域におけるわれわれの宣言の誠実さほど疑いをさしはさまれたものはない》(p. 37)と記している通りだ。こうした苦しい状況を一挙

に克服する方法を，夢は啓示しているかのようだ。事実，夢の第四部後半(《私はまたふたたび，一人で寝ている》以下）は，母の小言を聞く《私の家》から断絶なしに《城》へと移行しており，そこではもはや《あらゆる不安のたねは消え失せている》のだ。そこにふたたび，先刻の鮮烈な幻像が《同じ場所に》蘇ってくる。その場所にもはや《城》と《私の家》の区別はない。城の中の私の部屋であり，またその逆でもあるだろう。だが出現した幻像の強烈な現実感が，なぜ夢見る人を恐怖に陥れるのか。これこそシュルレアリスムが目指していたものではなかったのか。事実，一瞬前には，《私は陶然として今しがたの幻像の驚くべき明確さのことを思う》のに，なぜ《私は気が狂ってゆくのを感じ》て，恐怖の叫びをあげなければならないのか。

『夢判断』のフロイトによれば，夢は無意識の自由に放任されている興奮を放出させ，これを前意識の支配下に置くという安全弁の任務を引き受けている。その際，前意識の休息中の力の一部を活動させるという意味では，夢は常に多少とも人を覚醒させるのだが，同時にそれによって前意識の睡眠を確保する。こうして一つの妥協として，夢は無意識と前意識が協調しうる範囲内で，双方の願望を充足し，双方に同時に奉仕するのである。ある意味では人は欲望を満たして眠りつづけるために夢を見るのだと言えよう。ではなぜ恐怖のあまり目覚めてしまうような夢が存在するのか。この疑問に対してフロイトはこう答えてくれる。夢の形成過程はまず無意識の願望充足として許容されるが，この願望充足が前意識を強く動揺させて安静を保てなくなると，夢は無意識的興奮を拘束して前意識の支配下に入れるという第二の任務を果たせなくなる。すると夢は中断され，完全な覚醒に取って代わられる。また夢を見る人は自己の願望に対して特別な関係にあり，それらの願望を非難し，これに検閲を加える。要するにそれらの意識されざる願望は彼の気に入らない。それゆえ，その充足は快楽をもたらすことなく，逆にしばしば恐怖という形式をとって現れるのだ，と（注 10)。

ブルトンの恐怖の夢に上の説明を適用するならば，あの《二人の裸の女の子》はよほど強い検閲の対象になる無意識的願望に呼応していることになる。彼に発狂を危ぶませるほどの無意識と前意識の葛藤が，ほとんど神経症的な状態にまで達していたはずだ。夢の映像の極度の現実感は，恐怖の直接の原因とはなりえない。フロイトは，ある夢の要素が最大の強度を示すのは，その形成のためにも最も活発な圧縮作業がなされたからだと説き，ブルトンもこの説明を踏襲している。すぐ前日に，この要素を豊かに決定する出来事があったことが示唆されているが，われわれにはそれを知るよしもない。しか

し少なくとも，床の上におしっこの跡を残して消えたこの二人の裸の女の子から，幼年時の自己愛的・同性愛的傾向への退行を結論したり，さらには手淫の光景をほのめかすベルマン-ノエルの解釈は納得し難い。ともかくも夢は最初に，彼女たちが「私」に触ったり馬乗りになったり，おしっこを漏らしたりすることを許し，「私」はその鮮やかな現実感を味わい楽しむゆとりすら見せているではないか。自慰の夢としてなら，これは圧縮も転移もほとんど関与してないと言えそうに直接的な夢だ。しかし恐怖は幻影の二度目の出現に際して「私」を襲うという事実を，ベルマン-ノエルは考慮していない。

異性愛の挫折から自己を立て直すために，無意識がここで単に自己へのエロティックな関係に活路を求めているにすぎないなら，おそらく恐怖は生じなかっただろう。極めて強い検閲を要求するような，しかもそれを打破しかねない極めて強い欲望が関わっているはずなのだ。われわれはここで，この夢が二人の女の子の現実性／幻覚性（つまりは存在／非存在）というテーマにこだわっていることに再び注意を向ける必要がある。だからこそこの夢は『通底器』というテクストの夢の中に挿入されるに値したのだから。つまりこれが，テクストの知的課題である夢（幻）の現実性の証明に寄与し，一方でその感情的課題である喪失した愛の苦悩の克服に関連した夢であるとすれば，この現実的幻像，最初は消え去ることが惜しまれ，二度目に出現したときには極端な恐怖の対象となる幻は，愛する女の幽霊なのではないか。幽霊とは再び来る者（revenant），存在する非存在，生きかつ死んでいるものだ。自分を棄てて他の男の許に走った恋人Xの存在を，生きながら抹殺したいという欲望が出現させた幽霊。「私」が生き延びるために，彼女は現実に存在しなければならない（Il faut qu' elle existe.），言い換えれば彼女は存在しないのでなければならない。この両義性が，まさしくあの《恐ろしいほどの鮮烈さ》を帯びた幻に感じとれはしないか。それが鮮烈であればあるほど幻覚性の度は高く，それに相応じて，現前する対象の不在化，さらには死が，強く求められている。同時にそれと均衡を保つ必要があるかのように（これもまた通底器の原理だ），不在の対象（幻）の現前化も望まれているのだ。あの尋常ならざる恐怖は，無意識の殺人願望にこそふさわしい。

われわれは必ずしも夢の精神分析的解釈を試みているのではないことを，繰り返し強調しておく。この夢のテクスト的機能が問題なのだ。愛の対象に対する密かな抹殺願望という仮説は，第二部冒頭の銘句によって支持されるだろう。事実，そこでネルヴァルが悲しみ嘆いているのは，死によって永遠に失われたオーレリアである。しかもブルトンは，恋人Xが姿を消したため

に残された苦悩について，《私はある存在の不在と孤独に，というよりも，その存在が私のいない別の場所に現にいるということに，かつてこれほど苦しんだことはない》(p. 82) と書いている。彼女が私と共に存在するのでなければ，いっそ彼女が存在しないほうがまだしも許せると言わんばかりだ。また夢の中の二人の少女は 2 歳と 6 歳ぐらいとあるが，これは 4 か月後の，テクストの上では第一の夢における 20 歳のXと 65 歳の狂女（ナジャとみなされる）に対応するだろう。ここでは時間の圧縮という手段で，失われた女たちが性的に興味を引かない存在にまで還元されていると考えられる。第一の夢でXの待ち伏せと迫害が問題であったように，ここでも美しい輝く魚の追跡と投石が見られるが，この魚を男根表象とみなすベルマン-ノエルの解釈は単純すぎよう。おそらくこれは両性具有体であり，変身した愛する女(たち？)の肉体でもあるだろう。おしっこで床を汚す女の子は，われわれの推測が正しければ 2 歳の子で，X を表わしているのだが，夢の中で母が疑っているように——《母はモレの家の家具がみなこうして私のしくじりのせいで汚されてしまったのだと言う》——これはむしろ「私」が自分の責任を他に転嫁してXを非難しているのだ。事実，母が一度も住んだことがない町だというモレは，ブルトンとXの愛の生活が営まれた特別な場所のひとつであったらしい（注 11)。したがって，ベルマン-ノエルのようにモレ（Moret）という地名に「死んだ女」(morte) のアナグラムを見るとすれば，それは異性愛の挫折の根本原因たる母親への復讐というより，少なくとも直接的にはXに対するそれと考えられよう。「アシーシュの夢」は殺人者（アサッサン）の夢でもあるのだ。

Octobre 1991.

参考文献

ここには使用テクストと，参照した翻訳および研究書のみを挙げておく。

1 André Breton, *Les Vases communicants,* [1932] , "Idées", Gallimard, 1985.

2 アンドレ・ブルトン集成　1 (『通底器』豊崎光一訳，巌谷国士解題)，人文書院 1971. ただし，本文中での作品の引用にはこの翻訳を用いず，独自に訳出した。

3 André Breton, *OEuvres complètes* I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988.

4 Victor Crastre, *André Breton, Trilogie surréaliste,* S. E. E. S., 1971.

5 G. Durozoi et B. Lecherbonnier, *Le Surréalisme, théories, thèmes, techniques,* Larousse, 1972.

6 G. Durozoi et B. Lecherbonnier, *André Breton, l' écriture surréaliste,* Larousse, 1974.

7 Jean-Bernard Pontalis, 《Les Vases non communicants》, *Nouvelle Revue*

Française n° 302, mars, 1978, pp. 26-45.

8 Jean Guillaumin, *Le Rêve et le Moi*, (chap. IV: 《Rêve, réalité et surréalité dans la cure et ailleurs》), Coll. "Le Fil rouge", P. U. F., 1979.

9 Jean Bellemin-Noël, *Biographies du désir* (André Breton, Des vases trop communiquant), Coll. "Ecriture", P. U. F., 1988.

注

1 参考文献の項，4を見よ。LES VASES COMMUNICANTS et le《point suprême》，同書 pp. 49-81.

2 以下『通底器』からの引用は，参考文献の項1にあげた原書の該当ページを示す。

3 André Breton, *Entretiens*, Gallimard, 1952.同書所収の André Parinaud との対談，XII を見よ。

4 『通底器』では X，『ナジャ』の末尾では「きみ」(tu) と呼びかけられているこの匿名の女性は，1927年にブルトンが出会ってすぐに相思相愛の仲となった Suzanne Muzard であることが知られている。彼女はブルトンと妻シモーヌの離婚という事態を引き起こしながら，結局，元の愛人で作家のエマニュエル・ベルルと結婚した。ブルトンと彼女の関係は，いさかいと和解を繰り返したあげく1930年には終わったらしい。この愛の挫折がブルトンに非常な苦悩を与え，その克服と行動への再生こそ，まさに『通底器』の懸案であったと言える。ブルトンとシュザンヌ・ミュザールの関係の概略を，参考文献3の，Chronologie に見ることができる。

5 フロイド選集第11巻『夢判断』上，日本教文社，高橋義孝訳，p. 12以下。

6 フロイド選集第12巻『夢判断』下，pp. 43-44. 特に，《分析は不完全なもので差し支えなかったし，たとい僅かばかりしか夢の複雑な内部へ突き進めなかったとしても，分析はとにかく無価値なものではありえなかった》というフロイトの言明に注意したい。

7 参考文献の項，8を見よ。

8 参考文献の項，9を見よ。特に同書 pp. 169-175.

9 フロイド選集第12巻『夢判断』下，VI 夢の作業，C 夢の表現手段の色々，同書 p. 76.

10 前掲書，VII 夢事象の心理学のために，D 夢による覚醒——夢の機能——恐怖夢，同書 p. 349以下。

11 Moret-sur-Loing はセーヌ・エ・マルヌ県の美しい城塞都市。参考文献3の Marguerite Bonnet 編 Chronologie によれば，ブルトンとシュザンヌ・ミュザールは1928年8月末に，この町で数日を過ごしている。

［追記］

小論の脱稿後，松浦寿輝氏の論文「『通底器』における解釈と置換——アンドレ・ブルトンの反解釈学——」（東京大学教養学部外国語科編，『外国語科研究紀要』フランス文学論文集第30巻第2号，1982）と，『ユリイカ』1991年12月，アンドレ・ブルトン特集号（青土社）所収の諸論文，特に『通底器』との関連で鈴木雅雄「ひまわりは誰の花」

と松浦寿輝「文字・太陽・遭遇」を読むことができた。後日，これらの論考をふまえ，特に第二部のいわゆる《客観的偶然》に関する考察を展開したいと思う。

上記紀要論文における松浦氏の『通底器』解釈は，それ自体一個の作品解釈でありながら，逆説的にもブルトンの反解釈学的実践をここに認めて，これを称揚するものと言えよう。これは小論の立場とは著しく異なるもので，詳細な批判は別の機会に譲らざるをえないが，ここで簡略に対立点を指摘しておきたい。

第一に，夢と現実の通底を証明するとすれば，夢の解釈という作業は，十分とは言わないまでも少なくとも必要な作業であることをブルトンは否定しないだろう。通底とは同一化ではない。一方ではそれは，夢を通して現実に到達する可能性を認めることである。夢の解釈は夢の向こうに現実を透かし見る作業，ある意味で夢の透明化だということができるが，透かし見えた現実がそれ自体解釈を要しないほど自明なものという保証はない。実はブルトンは，この現実と見なされてきたものの現実性を否定し，それを超えたある《絶対的》現実の認識を可能にするような透明性を希求する人だ。それゆえ『通底器』第二部で現実生活の側から夢の世界への通底が企てられるのは，現実世界での出来事がいかに不透明な謎の連続で，本質的に夢と類似の解釈を要求する世界であるかを示すためである。その際，第一部とは逆に空間の不透明化の作業が必要になる。この場合はそのようにしてこそ，現実の向こうに夢が透かし見えるようになるからだ。

事実，第二部で報告される客観的偶然と命名された一連の出来事は，ブルトンがある基準に拠って選択し，配列し，記述したものであって，既にそれ自体がある解釈の所産なのだ。それゆえにそれは一定の意味一方向（サンス）を持ち，断続的な一種の白昼夢と感じられるように仕組まれていると言ってよい。それは知られざる自己の消息を伝えるものとして，夜の夢と同様に解釈を要求しているし，そうした試みはいつでも可能である。それはけっして《無秩序状態》でも《還元不可能な謎》でもない。また物語が第二部にはいるや，《ここではうって変わってあらゆる解釈的身振りがテクストから追放されている》どころではない，随所にブルトンの解釈的介入を指摘することができる。《記憶は，この何日間かについて，当時私にとって他のあらゆる欲望を凌駕していた一つの欲望の表明に役立つものしか取り戻してくれない。今読まれた話……そこには話をその真の核心のまわりに集結させようとする解釈の部分がどうしようもなく混じり合っている》(p.130) と明記されている通りだ。松浦氏の主張するように，《第一部のあの解釈の完全な成功のあからさまな強調は，第二部へのこの逆説的な展開を幻惑的な不意打ちとして準備するための一種のテクスト的な囮として機能している》とみなしてしまえば，今度は第二部における現実生活なるものの夢幻的性格を特権化することになるだろう。一切は意味に還元しえない謎，不可思議であり，解釈行為は成立しないという否定的命題に帰着することになる。そして他方，自己の夢の分析の果てに，《この解釈は私見によれば夢の内容を汲みつくしている》と性急にも断言した第一部のブルトンをとらえて——われわれはこれを彼の単なる勇み足とみなす——フロイトの方法を矮小化し，そのパロディを演じてみせているのだとか，事態を《もう一度逆説的に反転して》みせるという戦略を，この書物の構成の上に見てとるという結果になる。そうした仮説はほとん

どブルトンの誠実さ・率直さを疑うのでなければ成り立たない。松浦氏はまた，ブルトン自身の夢の分析が《幼児期の記憶への引照をまったく欠いている》ことについて，彼の夢の解釈の完全性ないし徹底性を守るために，幼児期の記憶という不可思議な謎を自分の夢の淵源から切り離したのだと書いている。だがブルトンは，それがたしかに夢の分析に一定の限界を与えることを認めているではないか。《しかしこの場合》，つまりこのテクストの主たる興味もしくは目的のためには，これで十分といえる程度に夢の意味を《汲みつくした》とブルトンは言っているのだ。

ブルトンは不可思議を不可思議なままに留めおき，それに魅惑されつづけることに甘んじる蒙昧主義者ではないはずだ。彼の中にひとりの超越論者ないし不可知論者を見ようとしてはならない。彼は狭量な合理主義者ではないが，神秘を神秘のために愛するのではない，人間の精神の領域を拡大せんとする超合理主義者なのだ。だからブルトンが《予め定められた潜在内容を顕現内容と意図的に合体させるという操作》に反対しているとしても，それは詩的オブジェの制作の際に無意識的な形成に委ねたほうが，夢と同等の劇的かつ壮麗な詩的衝撃力が得られるといっているのであって，けっして夢やオブジェの解釈を拒否しているのではない。解釈行為による意味の限定によって驚異が希薄になるのが事実としても，だからといって彼が解釈行為一般を否定しているとか，彼自身が解釈的身振りを見せるのは，その限界を証明せんがための一種の擬態だと考えるにはあたらない。解釈は果てしなく，謎をいくら解明しても新たな驚異や不可思議は世に尽きることがないだろう。

世界の解釈は世界の変革と等価であるとはいえないまでも，本来矛盾対立するものではないはずだ。《反解釈学者》ブルトンが存在するとしたら，それはただ《無力な》，《安易で通俗的な解釈学》の否定でこそあれ，けっして意味の解明という解釈行為そのものを否定するものではないだろう。いや，むしろ彼こそ，《謎—暗号の体系としての宇宙》を読み解くことによって一切を変貌せしめんとする，果敢な解釈学的冒険者とみなされうるのだ。

Février 1992.